法華経と私たち　第五回

信解品第四

長老の須菩提と摩訶迦葉・摩訶目犍連等は、釈尊が説く未曾有の法に歓喜し釈尊に、「我らの気持ちをたとえ話しをもって語る事をお許し下さい。」と語った。

ある人が若い頃に家出し他国に住み五十年たった。処々放浪し生活に疲れ故郷に帰ろうとある国に入った。その子の父親は出奔した息子を探したが行方は分からなかった。父親は大長者になり大勢の使用人を使っていた。たまたま貧乏な息子は大金持ちの父の住む町にやってきて邸宅の門の傍らに立って見ると、長者は大勢の婆羅門や王侯貴族や商人達に囲まれて取引の話しをしていた。子はその豪華さに圧倒され恐れをなして思った。「突然、王か大臣に会ってしまった。ここに私のような者のする仕事はない。ぼやぼやしていると怖いめに遭いそうだ。貧しい町に行って仕事を探そう」と子は立ち去ったが、長者は男を一目見るなり自分の息子だと気がついた。そして使用人にその子を連れて来るよう命じた。長者の前で何をされるか分からない恐怖から失神してしまった。長者は子の志が低い事を知り方便を使ってその子を引き寄せようと考えた。貧相な二人の男を雇い、あの男のところへ行って、「あの屋敷に働き口があり、便所のくみ取りで給料は二倍もらえるそうだ、俺たちもこれから行くので、一緒に雇って貰おう」と誘うよう言い聞かせた。男は邸宅で働くようになった。暫くして長者は自分の上等な衣服を脱ぎ、装身具をはずし、汚れた服に着替え、息子と同じような恰好をして近づき、「おまえは愚痴も言わず正直によく働く、ずっとここにいなさい、今日から私はお前を実の子のように思う、私をおいてよそに行かないように」と言うと子は喜び、長者の使用人としての立場に満足していた。長者は死期が近づくと、この子が実の子である事を打ち明け、財産を譲ると宣言した。息子は大いに感激して、「私は自分から願うことなく、自然にこの財産を得ることになった」と思った。

世尊よ、大長者とは如来の事です。そして我らは仏の子です。我らは本当の阿漢羅になった心地がします。我らは自分に執着が強く、目先のことのみを求めて、大乗を求めなかった。世尊は我らの機根に合わせて法を説かれたのです。

御彼岸とは？

お彼岸は「彼岸会（ひがんえ）」とも言い、春は三月二十一日頃の春分の日を挟んで前後三日間、秋は九月二十三日頃の秋分の日を挟んで前後三日間の一週間のことを言います。

彼岸とは向こう岸を意味する言葉で、迷いの多い此岸（この世）に対して、仏の理想の世界である向こう岸、つまり、悟りの世界や浄土のことを言います。日本では、その浄土に渡るために、善事を行い、先祖に思いを馳せ、供養を行う期間を彼岸と言うようになりました。仏教では西方浄土といって、西に極楽があるという考えがあり、春分の日、秋分の日とも、真東から昇った太陽が、浄土があるとされる真西に沈む日であることから始まった日本独特の行事です。約一二〇〇年前に全国の国分寺の僧侶らが、春と秋の二回にわたり仏を讃えてお経をあげたと伝えられています。それから次第に一般の人にもお彼岸が広まったとされています。

「暑さ寒さも彼岸まで」というように季節のシンボル的存在でもあります。仏教では次の六つの修行（六波羅蜜）を成し遂げれば、彼岸つまり悟りの世界（極楽浄土）に渡ることができると言われています。

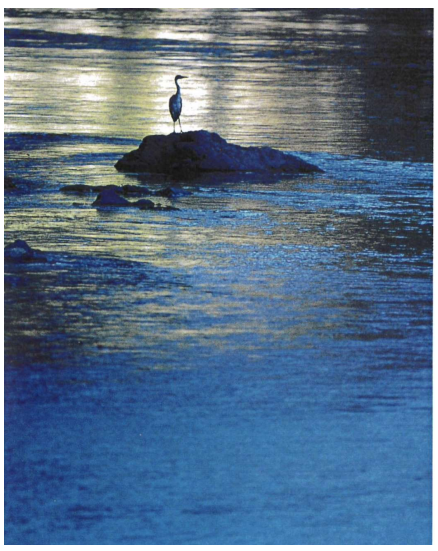
布施ー他人に施しをすること
持戒ー戒律を守ること
忍辱ー不平不満を言わず耐え忍ぶこと
精進ー常に仏道を精進努力すること
禅定ー心を安定させること
智慧ー真実を見抜く力を働かせること

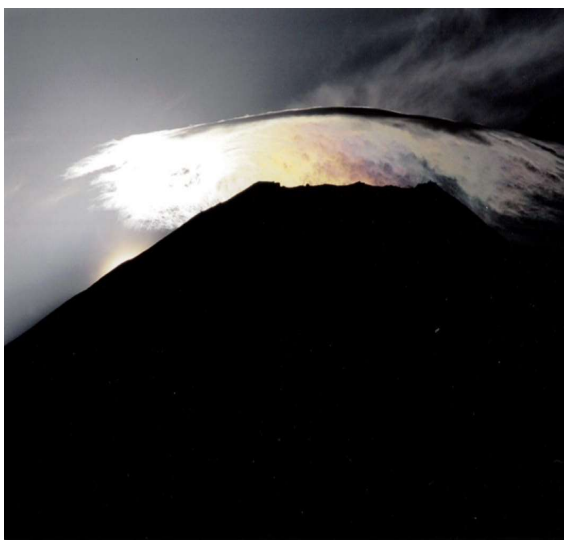
家庭では仏壇を清掃し、新しい花や季節のもの、おはぎ、彼岸団子などお供えして供養します。家族揃ってお墓参りに行きましょう。特に、子供を墓参りに連れて行くことは、ご先祖様を敬う気持ちを通して、人を大切にする気持ちを育てることに繋がります。墓参の折は本堂の御本尊様にお参りしてからお墓に向かうことも大切です。春分・秋分の日に夕日に向かって手を合わせると特に功徳があると言われています。

当山では管理寺務所に墓参用のお花とお線香を用意しています。ご先祖に感謝し、墓参しましょう。

小林　実様から写真の寄贈

お檀家で写真家でもある小林実様から二枚の写真が寄贈されました。





を受け、昨年十一月から本堂の瓦や庫裡の雨漏りなどの修理を順次行っていますが、工事は継続中で、全ての修理が終わるまで暫く掛かります。

たちばな会館の一階ロビーの排水と消毒が終わり、クロスの張り替えが済んだところで、新しい壁に掛けるようにと寄贈された写真で、清流の中と題する写真は、青梅市御岳で撮影され、第二回西多摩百景展で優秀賞を受賞した作品です。

冨士の写真は、私の主治医が前兆もなく病魔に襲われましたが、「ありったけの力こぶを入れて、全力で病気を克服したいと存じます。山部赤人の雄大な冨士を謳った『田子の浦ゆ　うち出でてみれば　真白にぞ　富士の高嶺に　雪は降りける』の歌は動きがあり色鮮やかです。この真っ白な冨士をイメージながら闘病したいと思います。」とお手紙を頂きました。一日でも早い復帰を願い、小林実様にお願いして冨士の写真を送らせて頂きました。その時に宝清寺にもと寄贈されました。

私も、二十七回登頂した経験のある力強い冨士山をイメージし、台風十九号により、甚大な被害を受けた建物の修復に勤めてまいります。

たちばな墓苑　二〇一九年度分　管理料納入のご案内

管理料は、毎年三月末日が納入期限の前納制になっております。未納の方は、早めにお納め頂きますようお願い申し上げます。

納入方法は、ご持参もしくはお振込でも可能です。

ご不明な点がございましたら、管理寺務所までお問い合わせ下さい。

【墓苑管理料振込先】

銀行名　多摩信用金庫
　　秋川支店
口座番号　一五一六二四九
受取人名　宗教法人宝清寺
　　代表役員石井前琮（ぜんそう）